第１２課　北と南から「癒しの地」へ

【暗唱聖句】

「これらの指導者の何人かが倒されるのは、終わりの時に備えて練り清められ、純白にされるためである。まだ時は来ていない」ダニエル書11章35節

【日曜日・ペルシャとギリシャに関する預言】

「さて、お前に真理を告げよう。見よ、ペルシアになお三人の王が立つ。次に、第四の王はだれにもまさって富み栄え、富の力をもってすべての者を動員し、ギリシア王国に挑戦する」ダニエル11:2

2章、7章、8章に引き続き、再びヨーロッパを中心に起こる国々の興亡の預言が語られます。そして反復と拡大の原則に従って、今までにまして詳細な預言描写となっているのが特徴です。またどの章の預言でも、終わりの時と御国の樹立で終わっていることと、それゆえ終わりの時の神の民がどのように生きるべきなのかがテーマとなっていることを押さえておくことが大切です。

さて、11章2節に預言されたように、キュロス王（この時の王）の後にカンビュセス、偽スメルディス、ダレイオス1世の3人の王が続きます。そして第四の王はクセルクセス（アハシュエロス）王で、彼は非常に裕福で力を持っていました。そこで彼は領土を広げるべく遠征してギリシャに戦いを挑みますが、小国ギリシャに跳ね返されてしまいます。「そこに勇壮な王が起こり、大いに支配し、ほしいままに行動する」（ダニエル11:3）と続きますが、これはギリシャにアレクサンダーが台頭し、ものすごい勢いで世界に帝国を築き上げていくことを預言しています。しかし、「その支配が確立するやいなや、この王国は砕かれて、天の四方向に分割され」（ダニエル11:4）てしまいます。これはアレクサンダーが32歳の若さで死に、国は4人の将軍が分割統治することを預言しています。すなわち、セレウコスがシリアとメソポタミアを、プトレマイオスがエジプトを、リュシマコスがシリアと小アジアの一部を、カッサンドロスがマケドニアとギリシャを統治するということです。

【月曜日・シリアとエジプトの預言】

11章5節からは、4つに分割統治されたあとに、さらに南と北の国が力を持っていく様子が預言されています。北の国とはシリア（セレウコス）で、南の国とはエジプト（プトレマイオス）のことです。両国は多くの戦争を繰り返しますが、そのことが11節まで書かれた預言です。6節には、「二国は和睦し、南の王の娘は北の王に嫁ぎ、両国の友好を図る。だが、彼女は十分な支持を得ず…」とありますが、これはセレウコスの1世の孫のアンティオコス2世テオスと、プトレマイオス2世フィラデルフォスの娘ベレニケとの間でなされた政略結婚のことを指していますが2年と持ちませんでした。このような細かなことまで預言され、見事に成就するのは驚くばかりです。ところで、なぜシリアやエジプトについて預言されているのでしょうか。それはユダヤ人たちにも少なからず影響があるからです。そのことを神様は前もって教えて下さっているのです。

「彼女の実家から出る一つの芽」（7）…プトレマイオス3世。ベレニケの弟。シリアを攻略。

「南の王」（11）…プトレマイオス4世。「北の王」…アンティオコス3世。

シリアとエジプトとの戦いが繰り返されますが、最初はエジプトが優勢で、15節になると形成は逆転します。アンティオコス3世がエジプトを攻撃し、シドンを攻略します。

【火曜日・ローマと契約の君】

「敵は意のままに行動し、対抗する者はない。あの『麗しの地』に彼は支配を確立し、一切をその手に収める」ダニエル11:16

ここで異教ローマが登場します。『麗しの地』であるエルサレムにまで手を伸ばしてくることが預言されています。特に、16節から19節にかけてシーザーを指し、17節の「娘」とは、クレオパトラを指すと考えられます。20節の「王国の栄光のためにと、税を取る者を巡回させる」とは、アウグストゥスを指しています。人口調査をさせたことでも知られていますが（マリアがベツレヘムに行ってイエス様を出産した）、それも税金を取り立てるためでした。21節の「卑しむべき者」とは、ティベリウスのことで、彼は風変りで卑しい人間として知られています。22節の「契約の君も破られる」とは、イエスキリストが十字架で処刑されたことを現わしていますが、ちょうどそれはティベリウスが皇帝のときでした。

＊一般的な解釈として、ここからあともずっとシリアとエジプトの戦いが続く預言であるとしますが、これまで繰り返されてきた他の預言は、異教ローマ、そして終末時代に続いていくことから考えると、異教ローマと当てはめた方が整合性がとれます。

【水曜日・次の勢力】

25節以降は、ローマとエジプトの戦いを描いていると解されていますが、他にも様々な解釈があり難しい箇所です。ただ、29節になると「この時は前の時のようではありません」（口語訳）とあり、これまでの国と国との戦いから宗教的勢力としての活動に変わり、神と神の民を攻撃してくるようになることがわかります。31節には、「彼は軍隊を派遣して、砦すなわち聖所を汚し、日ごとの供え物を廃止し、憎むべき荒廃をもたらすものを立てる」とあります。似たような表現が8章にも出てきましたが、これはキリストのとりなしを除外してしまった中世の法王権による天の聖所への霊的攻撃と解釈されます。32節から35節にかけての「契約に逆らう者を甘言によって棄教させる」とか、「剣にかかり、火刑に処され、捕らわれ、略奪されて倒される」などは、中世の教会の堕落と真の民に対する迫害ととらえることができます。

なお、アンティオコス・エピファネスがエルサレムの神殿を荒らした（紀元前167～164年）という説や、紀元70にローマがエルサレムを陥落させたことに当てはめる節、さらに最終時代の反キリストの働きを指すのではないかという説などもあります。

このような状況にあっても、「自分の神を知る民は確固として行動」（32節）します。そして、迫害も「終わりの時に備えて練り清められ、純白にされるためである」（35節）と、神様がなぜこのような民の困難を許されるのかについて書かれてあることに目を留める必要があります。しかし、それでも「まだ時は来ていない」と続きます。

【木曜日・終末の諸事件】

「終わりの時」という表現は実はダニエル書にしかなく、40～45節にかけては神の民に対する最後の攻撃が描かれています。具体的には、1798年の教皇制が一度失墜したときから、死者の復活（ダニエル12:2）まで、すなわち最後の勝利のときまでを指しています。「あの『麗しの地』もこうして侵略され、多くの者が倒れる」（41節）とは、そのことを現わしています。なお「麗しの地」は本来エルサレムを指しますが、終わりの時には物理的な場所よりも世界中にいる真の神の民を象徴しているのでしょう。「アンモンの選ばれた者、エドム、モアブその手を免れる。」とありますが、彼らは古代における神の民の敵ですから、迫害する者たちの中から回心するものたちが神の民に加わることを預言しているのではないかと考えられます。最終的に「しかし、ついに彼の終わりの時が来るが、助ける者はない」（45節）とあり、そして「その時、大天使長ミカエルが立つ。彼はお前の民の子らを守護する…その時には救われるであろう…」（ダニエル12:1）とあるように、勝利が約束されています。

なお、「北の王」とは、最初はセレウコスのシリアを現わしていましたが、やがて異教ローマ、そして最終的に法王性ローマを指すようになります。「南の王」は最初はプトレマイオスのエジプトを現わしていましたが、やがて無神論と結びつけられていきます。南の王と北の王との戦いとは、フランス革命と考えることができるでしょう。